

【文芸時評】

「正義」と文学

横尾和博

今回はこの一文から紹介しよう。

「ただ単調に澄んでいたものの中に、色が幾通りも出来てきた。透き徹る藍とろの地が消える様に次第に薄くなる。その上に白い雲が鈍にぶく重なりかかる。重なったものが溶けて流れ出す。どこで地が尽きて、どこで雲が始まるのか分からない程に懶もろい上を、心持ち黄きな色がふうと一面にかかっている。『空の色が濁りました』と〇〇子が云った」

作家と作品がお分かりだろうか。登場人物の女性の名を書くとは分かってしまうので〇〇とし、旧字や送り仮名を読みやすいように改めた。

夏目漱石の『三四郎』である。私はここで文学クイズをやりたいのではなく、漱石の感覚が現代の孤独と不安な時代にあっても、いささかも劣化することなく輝いていることを言いたいのだ。この若い二人の距離感を空に喻えて形容したシーンのあと、有名な「ストレイシープ」(迷える子)の話題を美禰子が口にするのである。漱石は、一九〇五年の日露戦争後、大國意識の高揚に湧く日本の世論のなかで、個としての人間や漠然とした不安などを作品に深く織り込んだ。百年経つたいま読み直しても漱石の感性は新鮮である。そこから私たちは何を学びとるべきなのか、哲学的な命題を突きつけられている。

さて今年の夏、『小さいうち』で直木賞を受賞したのは中島京子。昨年発売された彼女の『女中譚』は林芙美子、吉屋信子、永井荷風それぞれの作品のなかの「女中」を物語のベースに置き、現代の秋葉原無差別殺傷事件も取り込んだ連作集。私が考えるエンターテインメント系の小説とは、このような作品である。ぜひ一読の上、感想を寄せてほしい。また執筆の刺激になればと思う。

そのほか気になるのは林郁『山の神さん』で戦前戦後を逞しく生きた女の一代記。現代版「女の一生」である。

今年はいケル・サンデル『これからの「正義」の話しよう』がベストセラー。NHK教育テレビでも東大での講義の様子も含め十二週に渡り放送した。現代に生きる私たちにとって正義とはどのような概念なのか。正義について道徳的、宗教的、哲学的な視点からぜひ本誌の読者にも語っていただきたいものだ。たとえば、金貸しで強欲な一人の老婆を殺してその金を奪い、多くの貧しい人を救えるのなら、その殺人は正義なのか、否か。文学の問いである。正義をめぐっての議論がこれだけウケるのは、時代が正義を渴望しているからだろうか。だとすると嫌な時代である。誰もが正義を求める。しかし普遍的な概念としての正義など世界にはない。あるのはただ相対的な正義と、観念と呼ばれる人間の妄想だけである。国家、民族、宗教などはすべて人の共同・共通意識であり、その意識の集合体を共同幻想と呼ぶ。その意味で文学とは正義や国家、民族、宗教などの共同意識と

は対極にある、極めて個人的な妄想である。しかしこの妄想を大事にしなければならぬ。全作家の前号での「文芸対談」のテーマは「作品批評等の基準について」。私の基準はハッキリしている。本質論と技術論の二つであり、それぞれについてはこの場でも述べてきたところである。技術論はさておき本質論としては作品が哲学を持ち、人間の不可思議さを描けているか否か、ということだ。豊穣な感性と深遠なテーマと言い換えてもよい。私はストーリーでは選ばない。ストーリーは表層、現象であるから。もちろんおもしろく読者を飽きさせない手段もときには大切かもしれない。だが文学はそれだけではない。プルーストやジョイス、埴谷雄高「死霊」に読者が心躍るようなストーリーはないではないか。

私は同人雑誌の組織論や運動論にはなにも興味がないし、文学が好きで小説や詩などを愛し、自分の磁場で書いている全国の人たちに、私なりのエールを送ることしかできない。

世界が明日滅びたとしても、私はいまこの一杯のお茶のほうが大切である、というドストエフスキー『地下室の手記』の偏屈男の考え方をいつも念頭においている。

さて今回も同人誌の動向に注目しよう。本稿は十月中旬に筆を執っているので、その時点で編集部から届いたものが対象となっている。

『じゅん文学』65号、千田よう子「小さな窓」はフリーターの青年が新薬開発の治験のアルバイトをする話で、故郷のこと、早く死んだ父親のことなどを回想しながら二十日間閉ざされた空間のなかで入院生活を送る。ストーリーを重視の評者からは、賛意を得られないと思うが、主人公のアンニュイな感じがよく伝わってくる。同じく売れない芸人の青年の鬱屈を描いたのが猿渡由美子「みち、あまねく」。青年の鬱屈は冒頭の漱石の例をひくまでもなく古今東西文学の基本である。現代の若者はフリーター、ニートなどと呼ばれ職はなく、あつたとしても非正規雇用で将来に対する夢や希望を喪失している。「希望格差社会」に生きている。そのことを文学としてどれだけ描くことができるのか、この両作は私たちに多くのことを教えてくれている。その対極として高齢者の現在をユーモラスタッチに描いたのが同誌の藤澤茂弘「ろうれいラバイ」。FXで資産を失った退職した男の話であり、読みやすい作品だ。千田よう子は以前「幻想の街」で、ミスティアスなストーリーを創りだしており、今回の作品を読みながら多彩な切り口をもっていることがよくわかって収穫であった。同誌はいつも充実した作品が掲載されていて楽しみである。

千田の作品に比べてストーリーテラーなのは「山形文学」99集のしん・りゅう『アデオイオ』と『よななら』と」。主人公の女性は地方の古い造り酒屋の若奥様だが、友人に誘われて行ったイタリア旅行でイタリア男との出逢いがあり、その出逢った男が日本のイタリア料理店の雇われ店長となり二年間日本にいたが帰国してしまう話。情景が巧みに描かれテレビドラマの原作にしたいような作品である。笹沢信「ワロシヤ国漂流譚」は、文化十年遭難した尾張の船乗り重吉の漂流記で、先行文献の現代語訳とも読めるが、世は幕末ブーム、立派な仕事である。できれば解説として作者の幕末期への意見を詳しく掲載するとさらにこの意味がよくわかる。

「季刊遠近」40号、難波田節子「遠ざかる日々」は、女性の一生を描いた前述の林郁の作品と似ている。戦前幼くして両親を亡くした少女が兄を頼って上京し、苦勞を重ねて成長する物語で、これもストーリーで読者を惹きつける。

「中部ペン」17号、遠藤昭己「夜半のけむり」は、郷里の宮司を頼まれた五十代半ばの男が、定年退職後講習会で神職の資格をとり、この二年間は年末だけの神社の手伝いに来ていた。御神札を配りに訪問するのだが、その途中で氏子ではない女性にお祓いを頼まれる。梗概を書くとなんということはないのだが、この作者の魅力は置かれた情景に凜として向かう人間の立ち位置を見事に描いていることにある。

「詩と眞實」733、734、735、736号では、734号の内田征司「天空の船」。仕事と家族を失ってタクシートの運転手になった主人公が、ある夜お客の母子を遠くまで乗せていきその途中で人生を回顧する。哀感の漂う作品である。

「文学街」276号の遠野美地子「水郷慕情」、父の病死後潮来にやってきた母娘が小間物店を開き繁盛し、主人公のその娘は高校生になり同級生や近所の子どもたちとの交歓を描く。小説の枠組みがくつきりとした作品。

「海峽派」119号は加村政子「故郷崩壊」は、高齢で連れ合いも亡くした母が長年住んだ家を出て行く情景を娘の視点から描く。兄嫁と姑たる母の確執や葛藤が描かれ、今年行方不明の高齢者問題が起きたことを連想した。

「雑木林」13号、安芸宏子「好日の野バラ」、高校時代の親友から突然電話がかかってきて借金の依頼をされた女性の戸惑いと昔日の回顧譚。親友の変貌と主人公の心理が巧み。少し長いような感じもあるので、すっきりまとめて、場面転換や描写を工夫するとさらに際だつ。

「鉄道林」50号では海邦智子「有終」、国鉄に列車の車掌として勤め定年を迎え最後の乗務の日を迎えた父と娘の交錯する感情を短篇でまとめた。叙情的な作品である。同誌は鉄道に関わる文学を基本に風雪を重ね五十号を迎えた。敬意を表したい。

「北斗」7/8月合併号、9、10月の各号では合併号の尾関忠雄「漂流者」が不思議で魅力的な作品で、小説、評論、脚本、詩などいろいろな読み方ができる。ストロースをベースにした個性溢れる力作。

介護職員の視点で高齢者介護の現場をユーモラスに描いたのは、「雪溪文學」60号の鈴木まどか「月光仮面は誰でしょう」。短編だが重い問題を労働の現場から明るく描くその才覚に感心した。もっと可能性を追求してもらいたい書き手である。

作品の巧みさという点では、「米子文学」58号では野坂喜美「土蔵の記憶」が優れている。八十歳を超えた男が七年前に死んだ妻を回顧しながら自分の人生を振り返るのだが、老いに対しての悲しみや悪意がなく、むしろ老いることが癒しになるような自然体のリズムで刻んだ作品である。

「火山地帯」162、163号では立石富生「時の日和」が癌に侵された中学時代の恩師と教える子の交流を描いて目についた。教え子は五十五歳になっても独身で世間の常識とは違う価値観で生きている。人生観や死に際の振る舞い方について深く考えさせられた。

「たまゆら」80号の武田民子「雨の音」は十一枚の掌篇だが、少女時代に恋した少年から二十五年ぶりに電話がかかり声を聞いたが、それは余命幾ばくもないという辛い告白だった。深い悲しみが叙情的に描かれている。桑山靖子「流し雛」は離婚し夫に娘を預けて家を出た女性がある日娘の訃報を聞き愕然とする話。両作とも突然の死を前に立ちつくす主人公の感情の機微が上手だ。

愛と死とのテーマでは、「胡蠶・KOKO」9号、納富泰子「崖くずれ」も同様。二年前

定年退職した夫には愛人がいてそれはかつての部下の妻だった。部下は十八年前過労で死に夫は自責の念にかられていたのだった。関係の崩壊感を題名に比喻して読ませる。

「なんじゃもんじゃ」10号、小川禾人「友への鎮魂曲」^{レクイエム}は七十代の元大学の英語教師が学生時代の友人を回想する話。いくつものエピソードを重ね鎮魂としているところに特徴があるが、小説の場合はピンポイントで凝縮された場面を作ることが必要かもしれない。

「嵐」11号、風野涼一「夏の火影」、末期癌を患う母親の看病をとおして、若いころ家を出た父親への愛憎を息子の視点から描き、家族とは何かを問う。文章に無駄がなく主人公の心理もよく投影されている。

いつも多くの作品が掲載されている「九州文学」11号では三東崇昇「水晶川」が叙情的。ダム工事で水没する村、男の子と年下の従妹との交歓、水晶という小道具はすばらしいし、筆は確か。

「労働者文学」67号では文学賞受賞の本川さとみ「拳をにぎる」^{こぶし}が引きこもり、家庭内暴力など現代の若者のおかれた状況を母親の視点から描いて秀逸。

「ふたり」4号の白石すみほ「石神の島」は、神職の若い娘の恋物語だが土地の作用^{きよひめ}姫悲話伝説をベースにして現代のお話に転化しているところが巧み。筆が確かで若い女性が哀しみのあまりに石になる、というエピソードが現代に生かされていて秀逸。

「全作家」の前号である79号では、小笠原幹夫「病院の幽霊」は昭和三十九年の東京オリンピックを境に東京にいた幽霊、お化け、狐狸が棲みにくくなったという魅惑的な始まりで、少年時代の肝試しを描いた。ふつうの回顧譚と異なるのは都市に棲む異形なものたちへの愛惜が作品に満ちていることだ。平維茂「怨嗟」は妊娠中絶でこの世に生まれることにならない水子の声を主軸にして、素材のおもしろさが印象的。

気になったが字数の関係で評を書くことができずに心残りの作品は、「仙台文学」76号の連載中佐佐木邦子「氾濫」の確かな筆さばきでこの先が楽しみ。「河」156号川本和佳「流れる」、「月水金」34号、沢崎元美「市場の先の橋を渡って」、「阪東旅人「魚住稻荷町」の二編をおもしろく読んだ。「茜」29号の片山次郎「窓の光」、「婦人文芸」88号の都築洋子「エンジェルフィッシュ」、北村順子「トランシルヴァニアの雨」、「時空」33号の平野潤子「桃」、福島弘子「タワー」の各作品も心に染みた。誌面の都合で取り上げられなかったが優れた雑誌は次のとおり。「内海文学」130号、「宇宙詩人」12号、「柵」284号、285号、286号、「水脈」創刊号、「江別文学」75号、「四人」86号、「コブタン」33号。「いわき文学」25号、「風の森」13号。「抒情文芸」135、136号の読者投稿欄の小説群。

私宛にお送りいただいた単行本のなかでは北本豊春『丘の上の小さな世界』、橋てつと『白幻記』、小野村誠のノンフィクション二冊。『小さな奇跡』と『犬と歩んだ家族の絆』が作者の個性をそれぞれ発揮していて秀作である。

『全作家短編小説集第九巻』では、石川友也「ポンちゃんの抗議」が、昭和二十年代から昭和三十年代前半までの東京下町で身売を売る女たちの哀愁ある姿を少年の目線にとらえた秀作。姉妹の間の骨肉の争いを描いた江藤あさひ「修羅になりぬ」も目立った。文学街文庫の「小・掌篇作品選集5」、「札幌地方同人雑誌作品選集」では須崎隆志「銀メダルの月」、

海邦智子「ふんわりんこと降る雪に」が秀逸。

今月のベスト5は以下のとおりである。いずれも作者の個性溢れた秀作である。

千田よう子「小さな窓」、白石すみほ「石神の島」、内田征司「天空の船」、野坂喜美「土蔵の記憶」、鈴木まじか「月光仮面は誰でしょう」の五作品。

素材の選択、文章技術などよりも自分が書きたいというモチベーションの高い作品が、いまの時代にとっても重要である。同人雑誌の小説の素材の多くは自身の老いや闘病記あるいは親、配偶者の介護、またかつての恋人や同級生たちとの再会、不倫、青春時代の恋愛の追想などである。その素材を否定するつもりは毛頭ないが、本当にそれを書きたいのか、いまの文学情況に対峙できるのかと私は問いたくなる。自己満足で小説を書くことはよい。しかし大げさにいえば「正義」という思念を捨ててまでも、文学には使命があり、その使命を考え続けるのは私も含めた一人ひとりの書き手である。人間という不可解な存在に一步でも迫るためである。私はドストエフスキーからそのことを学んだ。

この稿を書き終えたとき、「文学界」

11月号で、難波田節子「雨のオクターブサンデー」が上半期の優秀作に選ばれ、また伊藤氏貴による最近の同人雑誌の傾向と分析が掲載されていた。難波田さんには心より敬意を送りたい。また若い批評家の手で同人雑誌の世界に光があたり、同人雑誌論が登場することは未来に一条の淡い光をみたような気がする。

筆者プロフィール

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座講師。現在時事通信、北海道新聞、東京新聞で書評を担当。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢、中西哲生などのレギュラー番組の企画・構成、台本制作を担当。人気番組「愛川欽也パッキンジャーナル」ではコメンテーターとしても毎週レギュラー出演中。ラジオでは東京FM「クロノス」で、文学や読書に関するトークを展開。著書「村上春樹とドストエフスキー」「新宿小説論」ほか、共著「立松和平 ドロップアウト」「立松和平 文学の修羅として」ほか。ホームページは、ネットマガジン「週刊！横尾和博」、「横尾和博の赤羽B級グルメ物語」。

※発行された同人雑誌を事務局まで一部お送りください。